

## 大海の一滴

八幡市立男山<sup>おとこやまひがし</sup>東<sup>ひがし</sup>中学校 三年 井口<sup>いぐち</sup> 慎之介<sup>しんのすけ</sup>

九州の佐賀県の小さな離島に曾祖父が住んでいる。今年で満九十七歳になる。毎年夏休みには必ずいとこたちと帰省していたが去年はコロナの影響で帰省できなかった。曾祖父は九州弁で話すので言葉は聞き取りにくいですが僕がそばに行くといつも頭をなでて「大きくなった」と喜び、しばらくすると戦争の話をはじめた。食べ物はもちろん、飲み水にも苦労していたと話した。僕たちが水道をひねり水を流しっぱなしで手を洗っていると、曾祖父は決まって「もったいないから水を止めなさい」と言う。僕はときどき、この「もったいない」という言葉を思い出し、節水を心がけている。

日本に住んでいる僕たちのほとんどは、水道をひねれば当たり前前にきれいな水が出てくる環境で生きている。その水はそのまま飲み水として使用することができるほどである。こんなにもきれいな水を使い、僕たちは掃除や洗濯をしている。果たしてこれは、世界中でも当たり前なことなのだろうか。

小学生の頃、僕と同じくらいの年齢の子どもたちが水を汲むために何キロも先にある川まで歩いているのをテレビで見た。その水は、日本で暮らしている僕たちにとっては、「きれいな水」と言えるようなものではなかった。彼らは生きるためにその水を生活用水として使用していた。もちろん飲み水としてもだ。僕は何ともやるせない気持ちに包まれたことを今でも覚えている。

多くの発展途上国では浄水処理をしていない水を飲み水として使用し、年間で一五〇万人以上の子どもたちの命が失われているそうだ。生きるために飲んだ水で、命を落とす。こんな悲惨な現状の中、僕たちにできることはあるのだろうか。今はまだわからないけれど、こんな事実があるということを決して忘れてはならないと思った。

近年、日本だけでなく世界中で想像を絶するような水の災害が起きている。水の星、地球。水の恵みによって育まれてきた生命が、今、水によって奪われている。環境破壊による地球温暖化も深刻化している。それらを食い止めるためには、限りある資源を大切に、持続可能な社会を創っていくことが大切だ。

僕は曾祖父の住む九州の海が大好きだ。透き通っていて、小さな魚たちがたくさん泳いでいる。そんな九州の海も、海岸にはどこからか漂流してきたペットボトルなどのゴミが大量に打ち上げられている。海洋汚染もまた、人間の生活が大きく影響している環境問題の一つだ。海の無い県を流れる小さな川でも、マイクロプラスチックが採取されたという。海洋汚染を防ぐためにも、僕たちの日常生活をもう一度見直すべきだ。

去年、僕の曾祖母が亡くなった。曾祖父と同じ九十六歳だった。曾祖父のようにおしゃべりではないが、いつも優しい笑顔で見守ってくれていた。葬儀の時、僕の目からは自然と涙があふれた。涙の塩分濃度は原始海洋の濃度と同じ

だそうだ。涙も海水もしよっぱい水であることに変わりはないが、涙のようにいつまでも美しい海であってほしい。